

小祝の一家

宮本百合子

青空文庫

二月の夜、部屋に火の気というものがない。

乙女は肩当てが穢れた染緋の搔卷かいまきをはおり、灰のかたまつた茶色の丸い瀬戸火鉢の上へへら台の畳んだのを渡したところへ腰かけ、テーブルへ顔を伏せて凝じつとしている。

厳しい寒気は、星の燦く黒い郊外の空から、往来や畑の土を凍らし、トタン屋根をとおり、夜と一緒に髪の毛の根にまでしみて来る。

テーブルの前に低く下つた電燈のあたたかみが微に顔に感じられた。電燈はすぐ近くに乙女の艶のない髪を照し、少しはなれて壁際に積まれたビールの空箱の中の沢山の仮綴の書籍を照し出している。テーブルのニスが滑らかに光った。その光沢はいかにも寒げで、とても手を出す気がしない。――

暫くして、乙女が懐手をしたまま、顔だけ搔卷の袖の上から擡げ、

「――湯たんぼ、まだ冷えないかい？」

ゆっくりした、一言一言に力をこめたような口調で夫の勉に訊いた。

同じテーブルに向つて正面のところには、家じゆうただ一脚の籐椅子にかけて、勉が、やつぱり搔卷をドテラがわりにシャツの上から着て頬杖をついている。勉は、北国生れの色白な顔に際立つて大きい口元を動かし、口重げに、

「いや。……やろうか？」

と云つた。

「いいえ、いい」

二人ながら小柄な体へ搔卷をかぶつた夫婦はまた黙りこみかけたが、今度は乙女が、
「——祖父ちゃん、本当にミツ子こと小包にして送つてよこすかしんないね」

長い眉毛をつり上げたような表情で云い、不安そうに荒れている自分の唇をなめた。

「ふむ……」

「祖父ちゃん……——何すつかしんないよ」

「……」

テーブルの上に、塵紙のような紙に灰墨で乱暴に書いた貞之助の手紙があつた。年よりならきツと書きそうな冒頭の文句も何もなしで、いきなり、度々手紙をやつたがいつ金を送つてよこすつもりかと書き出し、東京で貴様はどんな偉い運動をやっているか知らんが、

こつちでは一家五人が飢え死にしかけている。総領息子の貴様はどうしてくれる。金をよこさないのなら、手足まといのミツ子を小包にしても送りかえす。そのつもりでいれ！ かすれたり、そうかと思うとにじんだり、貞之助の頑固に毛ばだった眉毛を思い出させる不揃いの文字で罵倒しているのであった。小祝勉殿と書いてある封筒の下のところに、ひどい種油の汚点がついて、それがなかみまで透っている。

故郷のA市で、貞之助はここ数年間、毎朝納豆の呼び売りをしていた。おふくろのまきは夜になると親父をはげまして自分から今川焼の屋台を特別風当りのきつい、しかし人通りの繁い川岸通りまで引き出して一時頃まで稼ぎ、小学を出た弟の勇は銀行の給仕に通った。それで、妹のアヤを合わせて一家が暮しているのであった。

勉夫婦が、三つのミツ子をそんな暮しの中へあずけたのには、わけがあった。

前年の春、勉は仕事をしているプロレタリア文化団体の関係でやられ、びんたをくわされたのが原因で、悪性の中耳炎になった。勉は脳膜炎をおこすほどになったとき警察から、施療の済生会病院へ入れられた。そこでは軍医の卵が、一々そこを切れ、あすこをつめろと教えられながら勉の耳を手術した。その後の手当も専門医が診てびっくりしたほど粗末な扱いで、夏に入つて、極めて悪性の乳嘴突起炎を起した。友達のついで別の病院に入院

したが危篤の状態が一月以上も続いた。コサック帽のように頭に巻きつけた繻帯の上まで血をにじませて寝ている勉が果して恢復するかどうかということは、耳鼻科主任の、練達な手術を施した医者にさえ明言出来なかつたのである。勉を生かそうとする努力の裡で乙女は友達を着物をかりて質に入れるようなひどい苦面をし、やっと夜汽車にのつてミツ子を祖父^{じい}さん祖母^{ばあ}さんのところへ謂わば押しつけに置いて来たのであつた。

二円、三円と金を送れたのは、初めの二三カ月のことであつた。秋が深まつてから、乙女は手編の毛糸マントをミツ子に送つてやった。養育費を送るといふ年より達との初めの約束は実現されなくなつた。勉の命はとりとめた。けれども、その春以来、彼がその団体に献身的に働いていた出版部の活動が非常な困難に陥つた。人手がなく、そして、金もなかつた。朝、勉が丹精して集めた古い「マルクス主義」の合本を抱え、外套の襟を立てて耳の傷をかばい表から出かけると、乙女がその後を締めて水口から自分もついて出、顔なじみの古本屋の店頭で勉から十銭玉いくつか貰つて引かえず。そういうことが一度ならずあつた。

先ず、金を送つて貰いたい。次いで、ミツ子がどんなにまぎの手をふさぎ、そのために「おやき」の商売も減つて来たかということ、勇の筆跡で細^{こまこま}々くどいてよこした。勉

夫婦は、自分達が金を送れないことについて深く気の毒に思った。だが、今川焼の売り上げがだんだん減るということを、一概にミツ子の厄介の故とばかりきめて小言を云つて来ている親父の考えの狭さに勉はいやな感情をもった。十七になる次男坊の勇が、親父の云うまま、一行も自分の文句を加えずそのくどくどした手紙を書いてよこした気持をも、勉は少年時代から家を見た自身の経験から見落していなかった。A市は東北飢饉地方にまきこまれていた。戦争になつてからこの地方一帯の農家の困りかたは甚しかった。暮に、若者を兵隊に出した家のおつかあ連がかたまつて戦地からかえせと押しかけたような事件もあつた。川風が凍みるからと云つて、焼き立ての「おやき」の熱いところを懐へ入れ、それを喰い喰い夜遊びから帰る若者が減るのは当然のことであつた。そんな小銭がつかえる者は「おやき」をやめて、ワンタン屋の屋台に入った。

勉は、真面目にそういう世の中の有様を説明し、自分たちの生活の窮迫の原因をも、そういうものとして貞之助の納得のゆくように書き、わきに、この手紙は勇にも必ず読ますようにと書き添えたのであつた。

程経つて来た貞之助の手紙は、そういう勉の努力が全く無駄であることを示した。貞之助は鈍重な^{ずる}狡さを働かせ、暮しの行詰りの全責任をこの機会に長男である勉の肩にうつし

てしまおうと、孫のミツ子をかせにつかいはじめたのであった。その時、勉は体にあわせ
てひどく大きい口元をパフパフというように動かし、乙女を鋭い視線で見つ

「俺は十八まで散髪に行つたこともなければ、猿又を買つてはいたことだつてなかつたん
だ！」

と云つた。好きな本を買う銭をとるために、勉は郵便局がひけてから、夜、繩工場へ通つ
たのであつた。同じ繩工場へおふくろのまきも通つた。そして、勉の髪を刈るバリカンと
猿又を縫う布とを買い、末娘のひ弱いアヤの薬代を払つた。

勉は、そのおやじの手紙は焼いてしまつた。何かで家をかきまわされたとき、そんな手
紙が出、それを口実に運動をやめろなどと云われたら癩しやくである。彼はそう思つたのであつ
た。

乙女は勉の憤る心持を同感したが、大きく二重瞼の眼を見開いて中耳炎以来変に髪が薄
くなつた夫の顔をながめ、

「——祖父じつちゃん、ミツ子をいびつてないだらうかね」

と静かに云つた。乙女の声には、二重の心づかいが響いた。自分がミツ子一人ぐらいを育
てかね、たださえ苦勞の多い勉に家庭的な心勞までかける。それを、ひげ目に感じるので

あつた。

今年、田舎の二十日正月はつかがすんだ頃、アヤが、下手な、それでいて画かくのはつきりした字で、祖母ちゃんはこの頃死にたがってばかりいます、死ぬかと思つて私は心配ですという手紙をよこした。重たい孫をおんぶつて、強情な祖父ちゃんとの間にはさまり、苦心に疲れている半白の小ぢんまりした母親のおとなしく賢い顔つきが勉の目に髻ほうぶつとした。母親に対する思いやりから、勉はミツ子をとり戻すにしろ、そのまま送るにしろ入用な金策に心を悩ました。勉がプロレタリア運動に入るきつかけとなつた詩は、金にならぬ。

そこへ、種油のシミがついた今度の手紙が来た。勉がかえつて物も云わず机に向い腰かけるとすぐ、乙女が勉の古紺足袋をぶくぶくにはいた足で小走りに電燈の球のない台所へ入り、湯たんぽをつくつてあてがっているのは、炭を買う金さえ彼の交通費に在るからのことである。――

長いこと黙つていた後、勉は中指に赤インクについている手で親父からの手紙を縦に引裂きながら、

「いっそ、すっかり畳んで出て来いと云つてやろう」

大してふだんと変りない調子で云つた。乙女はとつきにそれをどう判断していいのか痺

れたように勉を見た。そのうち彼女の二重瞼の眼は我知らずつり上った二つの眉毛の下で次第次第に大きくなり、寒さで赤らんだ鼻のさきとともに、びっくりした野兔のような表情になった。

家財をたたんで、五人でここへやって来て、そして、どうして食うのであろうか。恐怖に近いものが幅ひろく彼女を押しつけた。そんなことを考える勉も、親父にどこか似たところがあつたのではないか。そう思った。

然し、勉はそのことを今日一日、二通り三通りの活動の合間に考えつづけていたのであつた。ミツ子を迎えに行く金も送る金も出来る見当はつかない。A市で、貞之助がますます食いつめるであろうことは目に見えた。東京へ出て、勇が働き、貞之助は納豆でも売り、祖母ばっちゃんはそのままで手ぎれいな性質で何か内職でもやれば、どうにか食つては行けるだろう。東京へ出て来て、自分らの暮しを見ればいいんだ。勉は強くそう思った。そうすれば、ミツ子が厄介になつたのをいいことにして、勇の次男坊氣質を助長させながら「長男の貴様」にまた食い下ろうとする狡い性根もいくらか癒るだろうし、勉の仕事の性質のみこむだろう。こつちの暮しを目で見て、一緒に思い知ればいいんだ。

説明されて見ると、乙女もそれを不自然なこととは思えなかつた。

「——いいかしんないね」

乙女は、眼を大きくしたまま、しかし腹からのように合点をし、舌を動かしてゆっくりと自分の唇を上唇、下唇となめまわした。

「——じゃ手紙書いてやろう……お前へね」

勉は、貞之助へ手紙を書き、それから別に長いことかかって薄い紙に何か書き、それぞれ別の封筒に入れ、一つの方を部屋の外へもって出て、どこかへしまった。

床に入つて、顔を障子の方に向けているだけで、乙女は眠つてはいなかった。勉が、お前さきへねれ、そういうときは、何もきかず床に入るか、台所わきの三畳へ行くかするのが、乙女の常識となつていたのであつた。

勉は、こまかい字で物を書いている間、ときどき搔卷の袖から左の指先を出して、耳の傷を押した。骨を削られて耳の後はぺこんとへこみ、ガーゼがつめられてある。寒さと疲労とで、今もそこがずきずき痛み、頭の半分が重たい。その耳のうしろには手術の傷のほかにもう一つ、ひどいひきつれの跡があつた。それは一九三〇年の冬、勉が「文戦」の方針に不服で脱退し、「戦旗」の活動に参加した当時、「文戦」の鳥打帽の写真で知られている石藤雲夫に、焼ごてを押しつけられたひきつれであつた。

二

祖父ちゃん。祖母ちゃん。アヤ子。勇。それにミツ子。これだけの人々が、間もなく上野のステーションから様々な色と形の風呂敷づつみと一緒に無言のまま小祝の二間のトタン屋根の下へ運びこまれ、床の間の上へまで煤くさい、どれをあけても襪ばらに似たものをつまめた包みを積みかさねて生活しはじめた。

勉夫婦の暮しぶりは変った。

朝、五時、まだ暗いうちに貞之助が先ず床の上へ起き直り、ところ狭く眠っている一家の顔の上にパツと電燈をつけた。そして、煙草をふかし始めた。パン、パン。煙管きせるをはたいた。煙草盆は、祖母ちゃんがちゃんと出して置いてやるのである。

物音で、昨夜二時頃床に入った勉が苦しそうに寝返りをうち、夜具をかぶった。

やがて、ミツ子がじぶくり出す。はじめ夢中で背中をたたいてやった乙女がすっかり目をさまし、勉が起きるのを心配しながら小声でいろいろすかそうとすると、猪首のミツ子は、わぎとそれを撥き返すように体を反らせ、

「いやーアん、ばアちやーん！ いやーアん」

半年の間の習慣で、ばアちやんを呼びたて泣き立てた。

すると、祖母ちゃんが、寢床の中から前掛を締めながら立つて、

「さアさ、ミツ子、泣くでねえよ、な、まんまやつから泣くでね、な？」

飯をもつて乙女の床のところへ来てミツ子にあてがうのであった。

勇が続いて起き、アヤが起き出し、勉も眠つておれず薄い蒲団をあげた。

勉が寝不足で蒼く乾いた顔を洗う間、祖父じじちゃんは草箒で格子の前あたりをちつと掃き、掃除のすんだ部屋へ上つて坐つた。アヤがチャブ台を出す。勇は、祖父ちゃんの拵げた新聞の間から落ちた色刷りの広告を、畳へおいて見ている。

道具のない台所で飯の仕度をしている乙女が、

「――祖母ばっちゃん、ちいと吸つて見な」

この頃は眉がつり上つたきりになつたような表情で、そこに跣かかんでいるまきに小皿をさし出した。まきは、音たかくその味噌汁を吸つた。

「よかろ……」

乙女と祖母ばっちゃんとは、味噌汁を薄めてそこへうんと塩を入れたものを皆にのませはじ

めたのである。

小さいチャブ台にぐるりと膝をつめかけ、ミツ子までもものも云わず、非常にはやく、一家は朝飯をくう。

それから出かけるまで時間があつても、勉は殆ど誰とも口をきかなかつた。縁ばたに近い方へ腹這いになって本を読んだ。思い出したように祖父じいちゃんに向つて、

「——おやきの鉄板どうしたかね？」

などと訊くことがあつた。

「売つて来た」

ぼつきり、貞之助が答える。二人の間で話はそれ以上のびないのであつた。

勉が、すり切れた紺外套を着て出かける。貞之助は、そういうときでも決して気軽に立つて来て見ようなどとしなかつた。手織木綿の羽織の肩を張つて坐つていたのであつた。

夜になつて勉が帰つて来る。電燈がついているだけの違いで祖父じいちゃんは一ひ日たつたのにやつぱり朝いたところで、新聞と煙草盆とを前におき、坐つていることが多かつた。勉の留守には乙女が、祖母ちゃんが才覚してもつて来た粉でそばがきぐらいをこしらえ皆を食べさせた。

三畳の方にある寢床に入ってから、勉が小声で、

「祖父ちゃん、一日何しているか？」

と乙女に訊いた。

「——坐つてたよ」

そして、おつかないことでも云うように乙女は一段と声をひそめた。

「祖父ちゃん、ぼけてしまつたんであるまいか——」

勉は返事しなかつた。そうやって頑固に坐つて、祖父ちゃんは自分の暮しぶりを観察している。そのことを勉は感じた。本当に自分が働き出さねばならないか、さほどでないのか、見ているような貞之助の黙りこくつた気分が、勉に苦々しく映っているのであつた。

毎日、五時頃になるとダラダラ坂の下の通りにあるラジオ屋の前へ出かけてゆき、職業紹介の放送をきいたり、少年らしい赤い頬に青いシェードの灯かげをうけながら、長いこと飾窓に眺め入つていた勇が、一カ月ほどして、京橋の方にある会社の給仕に雇われるようになった。二カ月払い五円二十銭の古自転車を買つて来てやつた。勇は嬉しそうにそのペダルを踏んで通い、夜帰つて来ると、

「今度の会社、でかいよ。僕らぐらいの給仕が五人もいるよ」

A市の銀行の小ささがわかったという風に口をとがらして云った。

「だけんど——皆がおらこと」

といつか国言葉に戻り、

「チビの癖して、しわん坊だつからやだなア」

その会社では給仕仲間で、互に奢りつこが流行はやつていた。勇は奢られて食べるが、奢りかえせないのでそう云われるのだった。祖母ちゃんがつかみ針でミツ子の附紐をつけ直しながら、

「——そんだら、勇、くわねばいいのに——」

と心配げに云った。勉が珍しく早めにかえつて机に向い仕事をしていた。

「そんなこと気にすることはいらんよ」

大きい口元を動かし、やさしく、励ますように云った。

「勇は、家をすけてるんだから、無駄銭つかえないからって、威張っていいんだゾ」

兄貴に似て、色白く、ずんぐりだが口元は小ぢんまりしている勇は、抗弁もしないが、賛成もせず、長まつて月おくれの「子供の科学」をめくりはじめた。こんな場合乙女は祖父ちゃんにも一言何とか云つて貰いたかった。然し、祖父ちゃんは、黙って坐り、煙草を

ふかしているのであった。

ところが、この祖父ちゃんも遂に他人にまぎつてものを喋り、馴れぬ東京の街を歩きまわらねばならないことが起つて来た。A市にいた時分からよく寝ることのあつたアヤが大分手のこんだ結核性の腹膜炎で病院に入れなければならなくなったのである。

勉はその頃仕事のいそがしさと身辺の事情から家に毎晩かえるということが出来なかつた。乙女が、祖父ちゃんの下駄をそろえて三河島の伯父のところへやつた。年はおつかつたが貞之助の伯父に当る勘吉は十何年来町役場の書記を勤め、東京にあるたつた一軒の親戚であつた。勇の月給十七円の中から返す約束で当座医者へ払う金をかり、役場の手づるでアヤを方面委員の手で療治させよう。やつとその智慧を搾り当てたのであつた。

勘吉の三度目の女房のお石が、二三日すると、貞之助に印をおさせるために借金証書をもつて、やつて来た。

お石は、障子のやぶれた上り口に入るなり、

「田舎もんは仕様がなないもんだねえ。家の片づけようもろくそつぽ知りやしないんだねえ」大仰に、色足袋を爪立てて、さもきたなそうに袂をかき合わせ、ただ一枚の座布団に坐り、ジロジロ臥ている病人のアヤやそのあたりを見廻した。そして、町ていねいにたすき褌をとつて

半白の頭を下げる祖母ちゃんに向い、

「御方便なもんですよ、ね、ふだんは出入りもしないどいて、金のいるときだけ役に立つのも、親戚だからさ。へえ、これに一つ、印して下さい」

乙女は、眉をつり上げるばかりか、痩せた両肩までをつり上げたような恰好で、ミツ子をおんぶい、お石の出す錢を握り、十錢の焼酎とあげもの五錢を買いに出た。勉は、この酌婦あがり、近所でも評判の伯母夫婦とは何年も行き来せず暮して来たのである。

乙女が、一合ぐらい入りそうな空ビンをおんぶした手にもって出ようとする、お石が、「ちよいと、このしとつたら！ それで買いにいくつもりかい？」

たとえ買うのは一合でも四合入るうつわをもつて行かなければ、一合より少くしか売つてよこさない。お石の世渡りは万事この調子なのであった。

ミツ子が、目を皿のようにしてチャブ台の前に釘づけになり、揚げものにさわるぐらい近くへ手をのばして指さし、

「あれ、くいて！ かあちゃん、あれ、くいて」

とせびつた。お石は、女の子がイーをするときのように下唇を突出し、

「これ、くいて！ か？」

と口真似をしながら、悪しみの現れた眼でミツ子を眺め自分ひとり焼酎をのんでは、揚げものを突ついた。

信心がないから、貧乏するし、病人が出る。赤い息子なんぞ出来るのだ。そういうことを肴に、十銭分の焼酎をのみきると、おくびをしながら、帯の間のガマ口から、また十銭玉一つ出して買い足さした。亭主がつとめからひける刻限までお石は二三遍、十銭の焼酎を買いにやるのであった。

お石がやつとのことで帰った後、貞之助はもう一度勉の机の引出しから三十円の借金証文をとり出して来た。打ちかえしそれを眺め、再び仕舞いに立ちながら、

「——貧乏はついてまわるなあ」

それは祖父ちゃんが東京へ出てから初めて乙女の聞く沁々した調子であった。

「金があれば、あんげだし……」

「だから、兄ちゃんがいとも云うとおりだろ？」

乙女は、お石のような女を出入りさせるくちおしさと、祖父ちゃんの心持が変って来たらしい期待とで、口の中が乾いたような声で云った。

「世の中が別なようになれば、アヤだって安心して養生しれるんだよ」

ソヴェト同盟では、区にそれぞれ無料の病院があつて療治をしてくれることなどを、乙女は祖父ちゃんにこまごまと、唇をなめなめ話してきかせた。「ソヴェトの友」のグラフなど、A市に一家がいた時分から勉が送つてやつていた。貞之助はこれ迄どう思つてそれを見ていたか知らないが、その日は乙女の云うことを凝つと聞いた。夜、祖母ちゃんに、「おやきの道具、あんげなものでも売らねばよかつたナ」
そう云つている祖父ちゃんの声がきこえた。

三

寝しずまつたアスファルトの大通りから、ガソリン屋について左へ左へと曲り、家並のまばらな新開地へ出ると、月は急に高く冴え冴えと、乙女の小さい影を地べたに落した。
遠く、近く櫛の木立が月の光のとけこんだ靄につつまれ、空には、軽い白い雲が浮んでいる。まわりに大きく暈をかけた曇りない月を見ながら歩いて行くと、乙女は月の光の隈なくふりそそぐ微妙な音を、自分の裾や草履の蹠あしおと音だけがかき乱しているように感じた。そんな時間に独り歩くのは淋しく、こわかつた。が、せめてこういう路でも歩いてい

ちに、新宿へ女給見習に通っている乙女はやっと人心地にかえるのであった。

アヤは方面委員の世話で慈恵病院に入ったが、附添はこっち持ちで、そのための交通費がいったし、祖父ちゃんもって行く弁当にうちで皆のたべているスイトンをあてがうわけには行かなかった。

お石が、出入りするようになってから賃仕事を持って来て、祖母ちゃんと乙女とに稼がせた。木綿物一枚二十五銭で、糸はこっちで持つのである。けれども、この賃仕事は弁口のようにうまく立たない二人の女にとって何か恐ろしい仕事であった。きちんと約束の日早めに二十五銭もってお石がやって来た。

「へえ、ここへおきますよ。お使者を立てて、いながらのお仕事だから、御身分のいい方は違つたもんだね」

最後の糸を、祖母ちゃんが歯でかみ切り、縁ばたに出て仕立上つた着物を、パタパタとはらうと、例によつて焼酎をのみながら待つていたお石がすぐ、

「どれ？」

と検査した。自分で癩癬そうに畳みつけて、暫く敷き押しをした。そして、帰りしな、立物の風呂敷を抱えて立ち上ると、片手を祖母ちゃんの、時には乙女の腺病質らしい鳩胸

の前へさしつけ、

「おかず買ってかえるから二十銭おくれ」

お石は睫一つ動かさずびったり顔を見据えてそう云うのであった。あまりのことにこちはゴクリと思わず唾をのむ。相手に圧されてことわる言葉も出ないうち、むぎむぎとそこにある小銭の中から二十銭というものをとられてしまうのであった。

乙女がカフエー働きの決心をしたには一日も早くこの鬼をのがれるためと、他にもう一つ原因があった。

勉が安全に活動をつづけて行くためには、家をはなれ、よそに室を借りる必要が迫っていた。

最近も雑誌が製本屋へ廻ったとき狙われはじめたことがわかったので、勉は機会をうかがい敏速に数百部の雑誌を運び出してしまった。急のことで発送する場所がない。円タクを盲滅法に市外まで走らせて、或る雑木林へその荷物をかつぎ込んだ。ちょうど土曜日のひる過のことであつた。勉が重い荷物でよろめきながら、麗らかな陽のさしとおす櫛やクヌギの間を林の奥へ奥へとわけて行くと、不意に芝草の生えた狭い平地へ出てしまった。草の上に、三人若い学生が寝ころがって喋っている。むこうもこっちもびっくりした。学

生は一時に話をやめ、一人は起き上ってソフトをかぶり、大きい口をキと結んで荷物を下げている小男の勉を眺めた。

引かえすわけにも行かず、勉はそのまま進んで再び平地のうしろに続いている樹の茂みにわけ入った。いい加減のところ腹をきめ用意の紐や紙をとり出して、包装をはじめた。暫くやっている、学生たちのいる平地の方角から、高く口笛が響いて来た。勉などの知らないジャズの節であった。が、勉はとつさにその調子のせわしい口笛が自分に向って吹かれていること、そして、警戒を意味していることを直覚した。雑誌を草で被い、カラーのところや裾の切れた外套をその上にぶっかけ、立小便をするような姿勢できき耳を立てた。

小枝を踏み折って二三人の蹻音と女の笑い声がだんだん近づいた。平地のところまで来ると、迷っている風であったが、左の方へそれて、やがて蹻音も賑やかな女の声も勉のところからは聞えなくなつた。

仕事が入り込んで二時間ばかりかかった。その間に、学生達はもう一度口笛で、その雑木林へ人が入って来ることを勉に知らせたのであった。

勉は、その晩乙女に感動をもつて、この若い学生達の示した支持について話してきかせ

た。部屋のいることをも、そのとき話したのである。

髪にウエーヴをかけたため、面変りして見える乙女が、夜更けてかえるときと一度は勉のテーブルの横へ立ち、気疲れで乾いた唇をなめなめ低い声でその日「麗人座」での出来事を話した。

「赤旗の歌なんか唄う民主主義者も来るよ。手つ頸の傷を女給にみして、拷問の跡だって威張ってた」

「——ふうむ」

「あたい癩だった——皆そんなかと思うだろうと思ってさ」

祖父ちゃん祖母ちゃんじっばっが来て暮すようになってから、すっかり睡眠不足になった勉は、頻繁に耳のうしろの傷を押えながら、むっつりして乙女の云うことを聞くだけで、自分から決してカフェーの模様など訊こうとしなかった。

乙女が少し立てつづけて喋ったりすると、不機嫌に、

「もういい。ねれ」

と云った。勉はカフェーの女給と乙女とを結びつけて感じることに馴れ得ないのであった。では、乙女がそういう稼ぎにいくらかでも向いたかと云えば、どうして、勉が、或は乙

女自身が考えているよりもっと、女給らしくもない妙な女給であった。

乙女の持番の客が来る。ボックスにどっかり腰かけ、

「さて、カクテールでも貰おうか」

すると、わきに立つて眉をつり上げ、眼じろぎもせず注文を待っていた乙女が、

「カクテール一杯ね」

必ず念を入れて繰返し、自分自身に向つて合点合点をしながら、眉をつり上げて去つて、注文されたものを運んで来る。

客が、手を出して、乙女の体にさわろうとでもすると、乙女は、器用にはぐらかすことも口で賑やかに応酬することも出来ず、手など握られたまま、音も立ねてず体をちぢめ、高く高く二つの眉をつり上げた。美しいところのある乙女の顔は急にまたびっくりした野兎のように必死な表情になった。客は思いがけない変化に、馬鹿らしいような、照れたような気になり覚えず真顔にかえつて手を離し、やがて、

「！」

舌打ちをするのであった。

見習期間を入れて二十日ばかり働くと、乙女は「麗人座」をクビになった。いつまでた

つてもサービスを覚えないからと云うのである。

勉が寢床の中へまで本をもつて入りながら、

「サービスつて、みんなどんなことをやるんだ？」

と、はじめてそのときになつてきいた。

「——わかんない！」

ウエーヴをかけた頭をふつて、乙女は悄気しよげた。

「わかんない！」と力をこめた云いかたが勉に四年前の乙女と自分とを思い起させた。

硝子障子のところに「豚肉アリマス」と書いた紙を貼り出した肉屋が、A市の端れにあり、乙女はその娘であつた。勉の従弟が重い眼病で、A市の眼科に入院したとき、その病院の手伝いとして乙女が働いていた。二人は段々口をきくようになり、郵便局に勤めていた勉は、「戦旗」などをかしてよました。乙女は小学を出たばかりだが、注意深く興味を示して読んだ。いろいろ本をかりて読み、或るとき、何と思いちがいはしたかマルクスの「資本論」をかしてくれと云つた。五日ばかりすると、まだ下げ髪にしていた乙女が、小鼻に汗の粒を出してその本を患者の室へ返しに来た。

「——わかつた？」

勉が、つい特長ある口元をゆるめ笑顔になって訊いた。そのとき乙女は、額からとび抜けそうに長い眉をつり上げ、二人とも小柄ながら、乙女よりは三四寸上にある勉の顔を見上げて、

「——わかんない！」

力をこめ首をふって、今云ったように云ったのであった。

勉は忘れていたが、二人がいよいよ結婚するとき、勉は牛や馬を貰うのではないから

「のし紙」など親にやるに及ばぬと頑ばり、乙女の母親は、牛や馬でないからこそせめて「のし紙」一枚なりと親から出して貰いたいと泣いた。乙女は、いけないと云うなら、家を逃げ出すまでだと云って、もう東京に出ていた勉のところへ来たのであった。

自分もいやだし、いやに思っているが仕方なく黙っている勉の気持をも察し、気苦労して乙女がとつた金は、勉の室をかりると、あと十円お石の借金に入れられたのであった。勉を引越さすことが出来、乙女がほつとする間もなくお石への借金は倍にかさむことになった。アヤが死んだ。葬式の金がなかった。小祝の一家のために、ほかの誰から融通が利こう。

祖母ちゃんとミツ子を紐でおんぶつた祖母ちゃんが、火葬場からアヤのお骨をひろつてかえつて来た。

祖母ちゃんは、戸棚の奥へ風呂敷包みをつみかえ、前の方だけあけ、そこへ水色の富士絹の風呂敷をひろげてアヤのお骨壺をのせた。

乙女が今度通いはじめた郊外のけちなカフェーから早番でかえつて来ると、祖母ちゃんはミツ子の足をだらりとたらししておんぶつたままその前に坐つて、

「——もう赤い布きれつこも、いらねようになつた……」

静かにそう云い、お骨壺から目をはなさず、

「ハあ……」

と溜息をついた。勇がかえつて来て突立つたまま、見馴れなそうに、ばつ悪そうにアヤの骨壺を見た。それから、ピョコンと頭を下げて礼をした。

泣く者は誰もなかつた。ミツ子は両肩の間に押し込んだようなおかつぱを乙女の方にふり向けて幾度も、

「お！ お！」

食いものでないのが残念という風に骨壺をよごれた指で指さした。

アヤの骨をどこへ埋めるにも、どの寺へ預けるにも、今や祖父ちゃん祖母ちゃんには故郷というものがなかった。――

居居つたような上京当時から貞之助の態度が、次第に失われはじめた。乙女はそれを、祖父ちゃんの坐り工合からさえ何となく感じた。

新しく借金がふえてから、お石は三日にあげずやって来た。勉はこの頃家へよりつかないらしいがどうしているかだの、乙女の出ているカフエはどこかだの詮索するときいて、

乙女は、

「祖母ちゃん、氣いつけな」
ばっ

瞼に力を入れ、真剣に云った。

「何されつかしんないよ」

金になることなら何でもしかねない。自分のいるカフエーへ押しかけて来る位ならまだましだ。そう思つて乙女はお石に恐怖を感じた。そのとき、祖母ちゃんは、わかつたような、分らないような工合で、

「そうだなあ」

と答えていたが、寝てから考えたと見え、次の朝、台所のバケツで乙女が勉のシャツを洗

つていと、わきへ来て洗濯ものをかき廻そうとするミツ子をおさえながら、

「——伯母おんばは、きのう来たとき、乙女も赤の手つだいでいるんだろと、云つておつたと報告するように告げた。」

「ほーれ、見な！ 祖母ちゃん何て云つた？」

「——カフエに出ておるもん、カフエに出ておると云つたけんどさ」

乙女は、自分のいない留守を心配し、

「祖父ちゃんにもようく云つときな、ねえ」

と注意した。この頃、貞之助は天氣がよければ古い乳母車を押して、子供相手の駄菓子を売りに歩いていった。

夕方、およそ勇とかつかつこの時刻に家の近くまで戻つて来ると、祖父ちゃんは用心して裏の露路から空身からみで入り、お石のいないのを確かめて表へ乳母車を押してまわつた。一度かち合つて、貞之助は細い売り上げの中からお石に十銭とられた。もう懲りているのであつた。

格子がガラリとあき、続いて乳母車の前輪を持ち上げて敷居を跨がす音がすると、ミツ子はどこからかそれをききつけ、抜からずころがり出して来た。

「お！ お！ じつちゃん！」

強情そうな小さい額を剽ひょうげ軽た悦びの表情でつり上げ、

「かしくいて！」

小さい足をとんび脚に坐つて四角い風呂敷包みに黒い両手をかけた。

「これ、祖父ちゃんがあがつてからむらえ」

「いやーン！ これ、あたいんちのよう……」

祖父ちゃんは黙つて上りがまち框に腰かけ、砂糖のかかったビスケットを一つ二つミツ子の手に握らした。ミツ子は、上眼で一人一人祖父ちゃんから、祖母ちゃんへと眺めながら、出来るだけの速さで一どきにそれを頬ばる。――

台所での問答があつてから、五六日後のことであつた。十時頃乙女が、ひどいときは三日に一度ぐらいいしか番のまわつて来ない「すずらん」に坐っている間に編んだレースの内職を届け、六十銭ばかり貰つて坂をぶらぶら中途まであがつて来ると、むこうの方からおまわりがやつて来た。片側は杉苗の畑で、道は一本である。悠ゆっくりのぼつて来ながらおが見ていると、そのおまわりは一軒ずつ表札を眺めて来て、小祝の紙切れを貼り出してある格子の前へ立つた。あけて、入つて、高い声で、

「こんにちは——いませんか」

呼んでいる。乙女の息は坂をのぼったためばかりでなくせわしくなって、思わず口をあけるようにしその辺を見廻したが、さり気なく二軒ばかり手前から曲つて裏へまわった。

折から、祖母ちゃんがバケツを出し洗濯ものを乾しかけてある。それをしぼり、竿にかけてひろげながら、物音たてず土間での応待をききすました。

「家族は、そうすると今のところ五人か？」

「さよでございます」

「その子は……ああ、ミツ子か」

おまわりは、帖簿をくつてでもいるらしく暫く黙っていたが、やがてガチャリと佩剣の音をさせて足をふみかえた。

「それで……息子の勉つてというのが行方不明なんだな？」

乙女は、ミツ子の小さい桃色のズロースを握ったなり、耳の内がカーンとなるような気持である。祖母ちゃんは、いつものゆつくりした低い叮嚀な声で、

「へえ」

と答えている。

「どうして家出なんかしたんだね、子まであるのに——」

「……………」

「——放蕩かね」

「——まあ、そんなようなものでございます」

乙女は肩に力を入れて俯向うつむいたまま思わずも笑いかけ、祖母ばっちゃん、でかした！ 本当
に乙女はそう思った。

三十年来、貧乏をしつづけながら、祖父ちゃんは自分ひとりでは飯もたけないままを押しとおしてどうやら勇も小学を出し今日まで暮して来た。いつか勉強が、祖父ちゃんは祖母ちゃんを持っていてるのだと云った。こういう場合に、乙女は祖母ちゃんのその一生懸命な気働きを感じるのであった。

数日の間、乙女は「すずらん」の緑や赤の埃っぽい色電気の下でも、ふと「放蕩かね？」
「——まあそんなようなものでございます」という二つの声をまざまざと思い起した。だが一度、一度と思ひ起すたびに、それに絡んでくる乙女の感情は複雑になった。

勉強が放蕩をするような男とは反対の性の男であることが、おまわりとの会話を何とも云えずおかしく妻としての乙女には寧ろ愉快にさえ感じさせたのだが、勉強のその確かりした

氣質について真面目に思いすすめると、乙女は自分と勉とのつながりについてこれまでになく深いものを感じた。

急な情勢の必要から、勉は乙女があれこれ考える暇もなくよそに住むようになった。勉は放蕩から自分をすてる男でない。今まではそこまでしか考えのうちになかった。が、自分が運動についてゆけなければ勉は自分を妻にしては置かないであろう。今では、動かし難くはつきり乙女にそのことが会得された。万一そういうとき、それでもと勉にからみ、恥かしい目を見せることは乙女にとっても出来なく思われた。プロレタリアの運動の価うちと勉のねうちがいつしか身にしみこみすぎている。乙女は、それらのことを考え、勉が家を出てから初めて、枕の上に顔を仰向けたままミツ子を抱いて永いこと睡らなかつた。

もうセルの時候であつた。

明るい、細い雨がよく降つた。雨ふりだと、しっとり濡れた前の杉苗畑から、若々しい杉の樹脂の香いが微かに漂つて来て戸棚にアヤの骨壺がしまつてある二間の家の縁ばたに匂つた。

おそ番の日で、乙女が勉のテーブルに向い本を読んでいた。こんな天気で商いに出られない祖父ちゃんが長いことかかつて新聞をよんでいたが、やがて、

「おう」

火のない煙管を口からはなして乙女をよんだ。

「ごんげにつらまつても、かまわぬものか？」

乙女は何事かと思い、

「どれ？」

立つて行つて新聞をのぞいた。三面の隅に、江東の職業紹介所で全協の労働者が二人あげられたことが数行出ているのであった。

祖父ちゃんの新聞のよみかたが違つて来た。乙女はそれを最近につよく感じた。却つて勇なんぞの訊かないことを、この頃祖父ちゃんの方が訊いた。祖父ちゃんは、黙つて乙女のたどたどしい説明をきいていたが、暫くして咳払いをし、棒をつき出すように、

「——駄菓子売の組合つはねのか」

と云つた。乙女は、何だかどぎまぎして、眉をつり上げた。

「——知らないね」

また暫くだまりこみ、祖父ちゃんは煙管をかんでいたが、その煙管をとると力を入れて灰ふきをたたき、云つた。

「早く勉のいうような世の中になんねば困る！」

それは、俺が困るといふ調子ではあつたが、乙女は祖父ちゃんのこれは大きい発展であると感じた。

「んだからさ、祖父ちゃん、いつかみたよなこと云うもんでないよ、ねエ」

一カ月ばかり前、勉が着ていた冬外套を乾したとき、ぼろぼろになっているのを貞之助がひっくりかえして見、

「——男が、三十近くもなつて、東京さいて、こげえなもん着て歩かねばなんねえとは——甲斐性がね」

と云い、乙女が思わずかつとなつて諍あらずつた。そのことを云っているのであつた。

祖父ちゃんは、しとしと雨のふつている外へ向つてゆつくり煙草の煙をはきながら、黙つて膝をゆすつた。

乙女は間もなくからみつくミツ子を祖母ちゃんにだまさせながら着換えに立つた。帯を結ぶ間も、大きい雨洋傘あまがさを背広の小柄な体の上にさし、口を結び、こつこつと歩いて行く勉の姿が乙女に見えるような心地であつた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第四巻」新日本出版社

1979（昭和54）年9月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第四巻」河出書房

1951（昭和26）年12月発行

初出：「文芸」

1934（昭和9）年1月号

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2002年4月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小祝の一家

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>